

キャリア教育とチーム援助で不登校児童生徒支援

講師 兵庫教育大学 生徒指導実践開発コース 教授 古川 雅文

はじめに

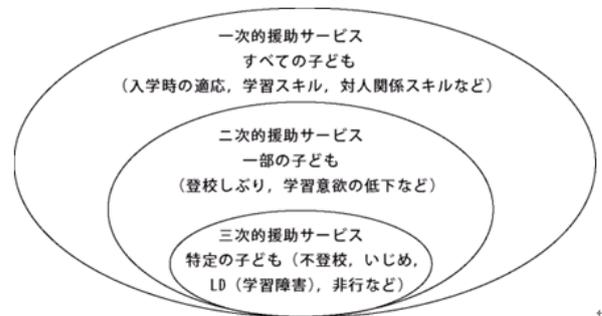
最近、学校では様々な問題が起きている。組織として目標に向かって活動している限り、必ず問題は起きる。問題が起こればそれは問題ではないが、これまで通りの対応では解決が難しく、その背景には社会のグローバル化、高度情報化、知識基盤社会がある。保護者や子どもたちも変わってきて、ラインやツイッターを使うことがごく普通になってきた。すると人間関係が変化してくる。子どもたちの遊びも変化している。かつては友だちと川で遊んだり、原っぱで遊んだり、車が来ないので道で遊んだりしたが、最近はゲームをして遊んでいる。

兵庫教育大学生徒指導実践開発コースでは、「包括的児童生徒支援」と言っている。子どもたちに様々な問題が起きて困っている。それに対して支援をするが、何か1つだけをすればよいのではなく、包括的・全体的に支援をしていく立場をとっている。ここでいう生徒指導は広い意味での生徒指導であって、「生徒指導＝包括的児童生徒支援」である。包括的に支援していくために生徒指導実践開発コースは「生徒指導」「キャリア教育」「道徳教育」「学級経営」「特別活動・地域連携」「教育相談」の6つの領域で成り立っている。それぞれの専門性をもった教員が、包括的に子どもたちを支援していこうとしている。

不登校対策は3段階構えで

「予防」と「早期発見」が大事なことである。

予防については、①学校の子どもたち全体への予防的なたらきかけ、②問題行動がおこる危険性が高い子どもたちへのはたらきかけ、③治療・カウンセリング・リハビリと予防を3段階構えで表すことができる。学校心理学では、一次的援助サービス、二次的援助サービス、三次的援助サービスという言い方をする（右



図：石隈利紀「学校心理学」1999年、誠信書房より）。生徒指導でも同じく一次的生徒指導、二次的生徒指導、三次的生徒指導という。

一次的援助サービスはすべての子どもたちへの対応で、日々の教育活動がそれにあたる。二次的援助サービスは登校しぶりや、学習意欲の低下、前兆が見られる子どもたち（英語では At Risk）に対する対応である。三次的援助サービスは特定の子ども、不登校、いじめ等が実際起こった場合の対応になる。

I. キャリア教育による不登校支援

「キャリア教育で不登校児童生徒支援」の意味は、

- ① キャリア教育による予防的活動＝時間的な展望を持つ、将来の生活や仕事について考える、体験的な活動をする

- ② キャリア教育による開発的活動＝子どもたちの持っている長所を伸ばす、得意な部分を伸ばす
- ③ 個々の児童生徒への対応

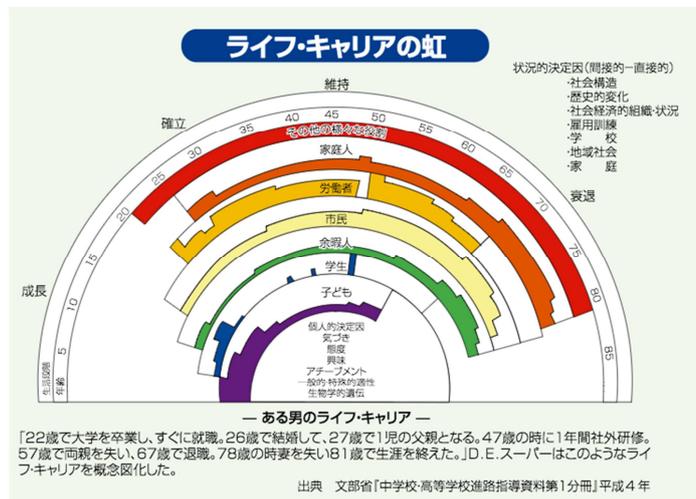
「未来への夢や希望とか目標をもつ」「一步を踏み出す意欲をもって行動をおこす」「今を充実して生きる」といったキャリア教育の目的が、不登校児童生徒への支援にもなるのではないかと考える。

「キャリア教育」とは？

「言葉は聞いたことがあるが、実際に学校で何をやっていいのかわからない。」とよく耳にする。キャリア教育はイメージしにくいところがある。「キャリア (career)」という言葉は、経歴とか職歴という意味で使われることが一番多い。「あなたのキャリアは何ですか」と聞かれると「私は小学校の先生をやってきました」などと言うことが多い。あるいは、進路とか職業とか、キャリア官僚等出世していく人を指したりする。

もともと「キャリア」には「人生」という意味がある。語源はラテン語の「カルス (carrus)」で、「カルス」というのは四輪車、車のことを指す。それが車の通る道、車がつけた轍の跡となり、これが道という意味から人生となった。キャリア教育は過去・現在・未来を含む人生の教育でもある。

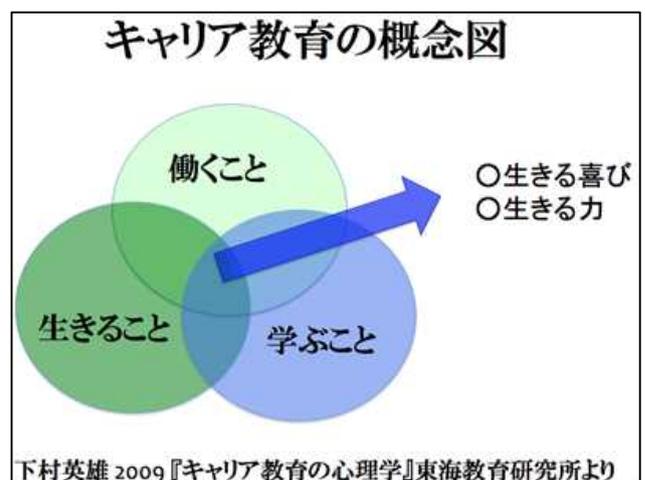
ドナルド・スーパー (D. Super) がキャリアという言葉に「人が一生の中で果たす働くことを含めた様々な役割とその連続」と定義している。スーパーは人生をすべて役割と考えている。人生を1つの虹として表し、それぞれのすじが役割を表す (右図：文部科学省「中学校キャリア教育の手引き」平成23年より、原図は「文部省「中学校・高等学校進路指導資料第1分冊」平成4年より)。生まれてすぐに、子どもという役割



があり、親が亡くなるまでその役割は続く。そして、学ぶ人としての役割が学生である。余暇人と書いてあるのはレジャーをする人としての役割。市民としての役割は、地域の清掃作業、ボランティア、祭りに関わったりする。労働者としての役割。これが働くということ。そして、家庭人としての役割。家族関係や、家事労働 (洗濯したり、掃除したりすること) である。私たちは色々な役割を持っている。

キャリア教育の概念

小学校、中学校の子どもたちは、今、学校教育を受ける立場にあるが、彼らには、社会に出て行く、社会人、職業人として自立していくという将来が待っている。学校教育の中で社会人、職業人として自立していくことを、子どもたちに準備するという意味合いがキャリア教育にはある。特に、不登校や特別な支援が必要な子どもたちに、非常に意識してなされてきている。



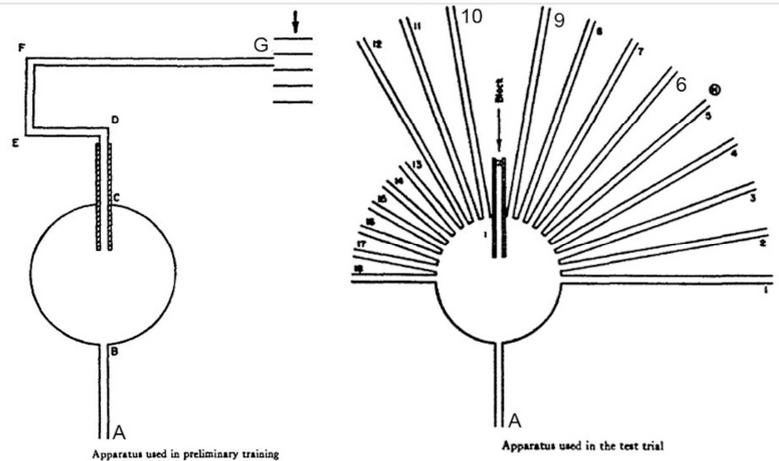
キャリア教育で大事なことは、学ぶことと働くことと生きることを結びつけることである。学校は学ぶところであり、家は生活するところであると言われてきた。しかし、例えば、働くようになれば学ばなくてよいかというそうではなく、一生涯学び続けなければいけない。子どものとき学んだことは、学校の中だけで終わりではなく、必ず将来に役立ったり関係したりする。それを学校教育、家庭教育、地域教育で教えるのである。子どもたちが将来、社会人、職業人になることを目指して、自己理解、社会や職業についての理解、学ぶことの意義を理解させたい。

時間的展望をもつ

子どもたちには、時間（人生の時間）というものを意識してほしい。うまくいかないことがあったとき、私たちは不安や焦りで過去や未来のことが考えられなくなり、森の中で道に迷ったような状態になる。しかし、時間というものが意識されると自分の新しい展開が見えてくることもある。

人は時間的展望（時間についてのイメージ）を持つことができる。まず空間についてのイメージを、心理学のトールマンという人が昔行った実験から考える。人は心の中、または頭の中に空間とか環境の地図を持っている。今、但馬やまびこの郷の体育館にいるが、但馬やまびこの郷の中の地図とか、みなさんの居住地、勤務地からここまでの地図を思い浮かべることができると思う。それは、実は動物でも

できることを、トールマンという人が実験で示した。ネズミに右図（Tolman, E. C. et. al. (1946) Studies in special learning. I. Orientation and short cut. J. exp. Psychol., 36, p.17 より）のような迷路の課題を与える。ネズミは探索行動があるから本能的にぐるぐる回る。そのうち、ゴールにたどりつく。そこに行くくとエサがもらえる。ネズミを何回かそこに放していくと学習し、入り口から入って一直線に進んでいくようになる。



次に入り口を行き止まりにしたときにたくさんの通路があるものに変えた（右図）。ネズミはどの通路に入っていくか。実は6番が一番多く、もともとゴールがあったところに行く。動物にも認知地図ができていたのではないか、イメージがあったのではないかとトールマンは言っている。人間はもっとすごいイメージ能力を持っている。地球規模のイメージ、太陽系の月とか太陽とか地球の位置を頭に思い浮かべることなど、もっと壮大なイメージを持てる。さらにすごいのが時間についてもイメージができることである。

〈ワーク1〉サークルテスト（主に予防的活動）

時間について色々なイメージを持つことができる。このサークルテストはコトル（T. J. Cottle）という人が考えた時間のイメージを知るための方法で

時間のイメージ
(サークルテスト)

現在・過去・未来がそれぞれ円で表されると仮定して、あなた自身の過去、現在、未来の関係について、あなたが感じていることを最もよく表すように、3つの円を描いて下さい。描き方は自由です。異なる大きさの円を使ってもかまいません。描き終わったら、どの円が過去・現在・未来かわかるように書き入れて下さい。

ある（右図は、都筑学「大学生の時間的展望」中央大学出版部，1999年を参考に作成）。図の見分け方は、過去・現在・未来のうち一番大きい円に気持ちが向いている、あるいは重要と思っているということを表している。発展方向も見ることができる。

- ・過去が最も小さくて未来が最も大きい→未来への発展
- ・未来が最も小さくて過去が最も大きい→過去への発展

次に、時間の関係だが、それぞれ3つの円が離れている場合にはあまり関係が深くない。接している場合は関係がある。円と円が部分的に重なっている場合はかなり関係がある。ある円が他の円に含まれている場合、例えば現在の中に過去が含まれているとか、過去の中に現在が入っているとか、未来が入っている場合は非常に関係が深い。都筑学先生（中央大学）は、このサークルテストと、アイデンティティテストという、「自分というものがどれくらい確立されているか」「自分の好きなこと」「やりたい仕事」など、自分というものがどのくらい自己同一性ができているかというテストとの関係を見ると、自分を解っている、自分のしたいことが決まっている人は未来の円を大きく描いていく未来発展型であり、3つの時間の関係が深く、得点が高いという結果を報告している。

しかし、色々な時間イメージがあっている。過去を非常に大事にする人があっても、現在をととても大事って思っている人があってもよい。関係性も、関係が深いという人も、別々に感じている人もあってもよい。大切なのは、自分が時間についてどう考えているかに気づくこと。子どもたちも興味深く取り組むが、中にはやりたくないという人がいるので、そのような場合は無理強いしない。

〈ワーク2〉楽観的思考

仕事や勉強に取り組むときに楽観性が大切だということを伝えたい。自分が計画した通りに自分の暮らしや出来事が起こるわけではない。セリグマンというアメリカの心理学者が楽観性ということを提唱している。失敗や物事がうまくいかない、嫌なことが起こったときに、すぐくじけてしまう人と少々のことではくじけないでまた元気にチャレンジしようとする人がいる。何かできごとが起こったときに、それをどういうふうに見受け止めるかで、楽観的に考えてチャレンジしようとする元気が出るか、くじけてしまうかが決まってくる。楽観的に考えてチャレンジする人の方が結果的にはよい結果が残りやすい。受け止め方次第で気持ちや行動や結果が変わってくる。それを4コマ漫画に表して考えてもらう。

右図（榎木敏之「中学校新入生の希望向上が学校適応に及ぼす影響に関する研究」修士論文（未公刊），2004年より）は、場面Aと場面Bという2つの4コマ漫画だが、最初の2コマは全く同じ。教室で先生が「テストを返すぞ」と言って、返ってきたテストを見たら35点だった。下の2コマが違っていて場面Aの場合は何か女の子が考えてガックリ落ち込んでしまった。場面Bの場合は別のことを考えたのか「ようし、次のテストがんばろう」と元気が出た。3コマ目のところでこの子は何を考えたのか。

人によりそれぞれだと思うが、テストであまりよい点が取れなかった場合に、それがイコール結果ではない。そこに受け止め方、自分がどう考えるかによって結果は最終的に出て



くるということ。結果というのは「頑張るぞ」と思うのか「ガックリくる」のかということになる。

楽観的になる方法として、「大丈夫だ。やればできる」と自分自身に言い聞かせる。人に「困っている」と聞いてもらう。相談するとか教えてもらう。認めてもらう。そして好きなことをする。チャレンジするのはとても大事である。うまくいかなかったことを後悔してばかりではなく受け止め方をポジティブにしていく。今に集中して何かを達成していく。人の役に立つこともとても大事である。未来については、積極的な目標を持つ。色々計画してやる気を出していく。楽観性ということから時間を考えてもらう。時間というのは不思議である。物理的な時間だけでなく心理的な時間がある。時間について、また現在だけでなく未来にも興味を持ってもらう。キャリア教育の中でも行っており、不登校の予防や対策にもなると考える。

自分の特性や職業について考える

〈ワーク3〉好きな役割

自分がどんなことに興味があるか、どんなことが好きなのかを考える。小学生のためのキャンプの実行委員になったとする。みんなで2泊3日のキャンプをうまくやり遂げたい。それぞれの班で、表のような役割をする。どの役割をしたいか、第1希望から第3希望まで書く。必ず3つ選んで番号をつける。3つ役割が好きな順に選べたら、ワークシートに第1希望で選んだのは何か書き写して、その役割を選んだ理由と、その役割をしたときどんなことが面白そうかを書く。第2希望、第3希望についても、選んだ理由と面白そうなことを書く。

例えば、同じ係を選んだ人同士で、何を選んだのか選んだ理由とその係をしたらどんなことが面白そうかをお互いに出し合い、気づいたことを話し合う。それぞれ違うものを選んだ人たちが集まってもその理由が違って興味を持てる。(小野田博之「自分のキャリアを自分で考えるためのワークブック」日本能率協会マネジメントセンター、2005年、及び山本幸生「高等学校における社会的自立を促すための心の教育総合プラン」2009年、特定の課題についての研究成果(未公開)を参考にした)

6つの役割はホランドというアメリカの心理学者の職業選択理論、職業を選ぶときの考え方を参考にして作っている。性格と職業の種類、職業の性質と人間の特性、どちらも6つのタイプに分けられ、対応している。

人間の性格などの特性は、現実型・研究型・芸術型・社

好きな役割	
あなたは、小学生のためのキャンプの実行委員になりました。みんなで2泊3日のキャンプをうまくやりとげてください。何人かで班を作り、班の中で役割を分担して、楽しいキャンプにしたいと思います。	
それぞれの班では、下の表のような役割をすることを決めました。	
あなたは、どの役割をやりたいですか？ 第1希望から第3希望まで選んでください。どうしても全員の人にどれかの役割をしていただく必要があるのです。必ず3つ選んで順番をつけてください。	
役割	主な内容
1. テント・機材係 <input type="checkbox"/>	【事前】キャンプ道具がそろっているか、ちゃんと使えるかを確認し、必要があれば修理などしておく。 【当日】たき火や炊事に使う小枝をあつめ、使いやすいうように割ったり、切りそろえたりした後、班ごとに分けて配る。子どもたちがテントを張ったり、火を起こしたりするのを手伝う。
2. 班係 <input type="checkbox"/>	【事前】キャンプをする場所として、条件に合うところをインターネットで調べておく。 【当日】翌日のキャンプのために、気象情報などをネットで調べ、次回のキャンプの参考になるよう、子どもたちにアンケートをする。
3. デザイン・音楽係 <input type="checkbox"/>	【事前】キャンプ参加者を募集するためのチラシづくりや、当日配布する楽しそうな「しおり」を作る。スタッフTシャツのデザインも制作する。 【当日】キャンプファイヤーや、朝夕のついでに流す音楽を選ぶ。最終日に参加者にあげる記念品のデザインも担当する。
4. 引率・兼務係 <input type="checkbox"/>	【事前】問い合わせへの回答や、事前説明会での説明。 【当日】気分が悪くなった人や、夜眠れない子などの相談などを担当。朝の散歩大会の引率、工作や絵ごう状さんの指導もする。
5. 企画・運営係 <input type="checkbox"/>	【事前】キャンプ全体の計画の案を作り、他の係と話し合って調整する。 【当日】キャンプ全体の運営管理を担当し、朝夕のついでにキャンプファイヤーでは、司会進行を担当する。班対抗のイベントでは、それぞれの班のまとめ役になる。
6. 事務係 <input type="checkbox"/>	【事前】計画書の作成、参加費の入金チェック、お金の管理。 【当日】連絡係として本部につめておく。貸し出し品の受け渡しの管理や、当日の現金の管理、貴重品の保管など、食べ物を納入する業者への対応も。

1. 好きな役割とその理由を考える
 a. 3つの役割を選び、それぞれの役割の下の□の中に、1、2、3と順番を書きましょう。
 b. 「ワークシート1」の()の中に、第1希望から第3希望の役割を書きましょう。
 ※次に、「①その役割を選んだ理由」と「②その役割をしたとき、どんなことがおもしろそうですか?」について、出来るだけ具体的に書いてください。

2. グループで話し合い、考える
 a. 第1希望で同じ役割を選んだ人どうして集まってください。
 b. その人たちが、「①選んだ理由」について、ひとりずつ話し合ってみてください。お互いに質問があらばして下さい。
 c. 「②おもしろいこと」についても、同じように進めます。
 3. 気づいたこと、感想を書きましょう。

ワークシート1	
好きな役割	
第1希望の役割	()
①その役割を選んだ理由	
②その役割をしたとき、どんなことがおもしろそうですか?	
第2希望の役割	()
①その役割を選んだ理由	
②その役割をしたとき、どんなことがおもしろそうですか?	
第3希望の役割	()
①その役割を選んだ理由	
②その役割をしたとき、どんなことがおもしろそうですか?	

会型・企業型・習慣型という6つのタイプに分けられる。例えば、現実型は、機械や物を扱う実際的な活動するのが好き。調査係は研究型に対応しているが、研究や調査のような活動するのが好きなど。タイプ分けするのは危険性もあるが、わかりやすくなるという点でメリットもある。先生にも色々なタイプの方がいる。学校の先生方の仕事は全部総合したところが強い。全体的にいうと社会型とか研究型とかがかなり強いのではないか。

職業レディネステストというのがある（編著：独立行政法人 労働政策研究・研修機構）。テストの中に、先ほどの6つのタイプを六角形に表して、様々な職業を提示している。例えば現実型はRになる。ここには、「ガソリンスタンドのサービス員」「建築機械オペレーター」「裁縫工」「消防士」等の職業名がたくさんあがっている。研究タイプだと、「科学研究者」「学芸員」「システムエンジニア」「調査員」など。芸術タイプだと「声優」「タレント」「マジシャン」など。それぞれの領域で1番目は研究タイプだったが2番目で芸術タイプを選んでいたとすると、職業としては「ゲームクリエイター」「天文学研究者」という職業を見つけることができる。

このように職業を子どもたちが見て、自分が「こういうタイプ」「こういうことが好き」ということを理解し、どんな職業があるかを理解する。「自分は調査係が好き。だから研究の職業に就く」と決めるテストではない。あくまでも自己理解・職業理解の参考にする。すると「こんな職業もあるのか」と、調べることができる。こういうゲームをした後は興味を深めて、世の中にいろんな仕事があることに気づき、自分が何に興味があるのか気づいて、自己理解、社会を理解するための1つの手段・手立てとしてもらいたい。自分の類型・職業を決めるのではなくて、さまざまな職業を知るきっかけにすること。

将来について語る

私が「仕事のよいところ」で、伝えたいことは、働く、仕事をするのは辛いことも多いが、喜びもあること。人の役に立つとか、働くとは「はた」を「楽」にすること。仕事をしていると他の人から「～してくれてありがとう」と感謝されることがある。どんな仕事も必ず人の役に立っている。いろんな仕事をする人がいて、この社会が成り立っているということも子どもたちに伝えていきたい。働くということは自分が成長していくということ。

小学校では、小学校4年生で2分の1成人式をされている方も多い。これもキャリア教育で、自分の未来について考えるということ。兵庫県が出している中学校のキャリアノートでは、自分が30歳になったときの職業について考える。どんな仕事をしているか、その時の自分は何を大切にしているか考えるワークが入っている。未来のことを考えることが、今を元気に積極的に生きていくための力になる。ただそのときに、将来について語るというときに、聞く側がそれをしっかり聞かないと、将来について語ったことが今を生きていく元気につながらない。

かかわるといことがとても大事だという例で、不登校の子どものところに毎日出かけて行ったが全然会ってもらえなかった。でも、今日が最後というときにやっと会ってもらえて、そこから色々なことを話してもらえたということがある。これは河合隼雄先生の言葉だが、「希望を失わずに寄り添い続ける」ことがとても大事。相手の話を聞くときには、認める、受け入れること。また、自分も話すこと。それをコミュニケーションのキャッチボールという。カウンセリングでは傾聴という。相手のことをしっかり聞く、注意を向け続け、相手を受け入れるということ。ありのままの相手を受け入れる。共感性とい

う言葉があるが、相手が今、「怒っている」「いらついている」「不安に思っている」「悲しんでいる」「喜んでいる」など、その状況を理解するという面がある。これは相手の「表情」「声の調子」「動作」「さまざまな言葉の内容」から理解する。もう1つは相手と同じ感情を自分も持つということに近い。「今、悲しいんだね」「そのときはすごく腹が立ったんだね」と理解したことを伝えることが大事。自分も共感するという事。共感性には、認知的なレベル、感情的なレベル、そして伝えていくというコミュニケーションのレベルが入っている。保護者の方、先生方は熱心であればあるほど自分の思いとか、「こうやったらうまくいく」ということをつい相手に伝えたくなるが、肯定的に相手を認める。過去のことにこだわらずに積極的な目標を持つということが大事である。

即興劇をされている絹川さんという方が書かれた本の中に「YES AND」という言葉が出てくる。「YES BUT」法というのがコミュニケーション方法の中にはある。いきなり、「それはちがうよ」「それはだめだよ」「～だよ」と言ってもなかなか相手は納得してくれない。そこでまず、「ああ、そうだね」と言ってから「でもね」というふうにして伝えなさいということがある。それは「YES BUT」です。しかし、「YES BUT」というとなかなか伝わらないことが多い。むしろ「YES AND」で伝えていくということ。

オファーというのは、相手に「～だよ」と返していくことである。例えば、「今日は火曜日だよ」「火曜日なんて大嫌いだ」と言うところまで会話が終わってしまう。あるいは、このクリスマスケーキ。「このケーキ一緒に食べましょう」と言っても「えー、このケーキ腐ってるよ」では会話にならない。「ケーキ食べましょう」は「おいしそう」「そうですね。このケーキ、私がつくったの」「じゃあ、みんなも呼ぼうよ」と話題が発展していく。相手の言うことを受け入れて、しかも「～だね」「遊園地に行こう」と言ったら「いいね～」というのがYES。「しかも」というのが「AND」。「僕、招待券2枚持っているんだ」「すごい。その遊園地、前から行きたかったんだ」というふうに話題が繋がっていく。やはり「YES」としてもらうことが大事。そこから発展させていくことが大事。(絹川友梨「インプロゲーム」晩成書房、2002年より)

〈ワーク4〉タイムマシン・クエスチョン

タイムマシンに乗って自分の10年後のある日を見に行ったら、どんな外見で、どんなふうに、誰とどこで何をして過ごしているだろうか。

どうなっていなければならないと考えると苦しくなるので、どうなっているのかなということイメージして自分の10年後、何歳になっているかなと思って、だいたい思い浮かべてみます。

こんなことをしていたらいいなとか、こんなことをしていたいなとか。ここで、誰とどこで何をしているかをビデオで見える感じでそのイメージを伝えてみる(ビデオトーク)。3人で順に1人が話をして、1人2～3分で話して、聞く側の2人は肯定的なコミュニケーションで相手を認め、「YES AND」でアイデアを付け加える。それに対して肯定的なリアクションで「いいね」と、積極的な話が広がっていくように聞き合う。

自分の10年後について、結構楽しいかもしれないが、なかなか語りづらい場合もある。小学生では、例えばタイムマシン付きどこでもドアがあったとしたら3年後の自分とか、中学校に入った自分とか、どこで何をしているか考える。不登校の中学生の女の子に3年後の自分、高校に入っている自分というのをイメージして、そのときの様子を色々語ってもらう。そうすると、その中に自分の好きな授業を受けているとか、テニスが好きだからテニス部に入って頑張っているとか話しているうちに元気が出てき

たり、学校に行ってみようという気持ちになったりすることがある。将来のことを考える、イメージしてみると、今を元気に生きる力になることもある。(黒沢幸子「指導援助に役立つ スクールカウンセリング・ワークブック」金子書房、2002年より)

II. 児童生徒の状態に気づき、理解すること

キャリア教育によって時間を意識したり、世の中のことや自分のことを理解したり、将来について考えたりすることが不登校への予防とか対応になると考える。

児童生徒理解というのをあげたが、子どもたちの状態に気づくというのがカウンセリングでも非常に大事である。但馬やまびこの郷で不登校対応のパンフレットを作っている。その中身を見ると、気づくということ、最初に欠席したときに敏感になることが大切であると書かれている。ある本によると、月に3日が目安になる。そういうことに敏感になるだけで不登校が2割減ったと、小林正幸先生(東京学芸大学)は言われている(小林正幸「教師のための不登校サポートマニュアル」明治図書、2005年)。ストレス反応は体に出たり、不安・緊張は表情や行動に出たり、攻撃・怒りという形で出たり、無気力・憂鬱という反応で出る。先生方も日々観察されていると思うが、プラスして質問紙を利用することも有効と考える。

県立教育研修所の心の教育総合センターに、いじめ未然防止のための「CoCoLo-34」というアンケートがあり、インターネットでダウンロードできる。個々の児童生徒の状態や学級の状態を把握できる。いじめが不登校のきっかけとなる場合も多いので、それらを把握するのに有効だと思う。全部で27項目プラス7項目からできている。グラフでクラス全体の様子がわかる。例えば、規律性は高いとか、ストレスマネジメント能力は低いとか、自己効力感とかセルフコントロールは高いとか、仲間づくり・絆づくりの数値は低いとか、高い・低いで表すことができ、クラスの様子を知ることができる。そして個人の様子も知ることができる。例えば出席番号1番の子どもは道徳性とか思いやりが低いとかが表される。選択肢の一つとして知っておきたい。

III. チーム援助

最後にチーム援助について。不登校の子どもたちに支援をしていく、かかわっていくときに、ある人が一人でそれを抱え込んで何か改善しようとしてもなかなかうまくいかない。むしろ、何人かで協力しながら問題に対処していくことが標準的なやり方になってきた。もちろん、かかわりというのは一人一人だが、チームで対応していくのが大事。ポイントの1つは問題志向ではなくて解決志向でいくということ。問題の原因をなくせば問題は解決するが、原因がわかってもそれをなくせない場合もある。課題を解決するために助けになるものに発想を転換してみる。これは問題志向から解決志向へということで、問題はあるがその状況の中でうまくいっていることや肯定的な側面もある。その子どもの長所、好きなことなど。治療的な考えでいくと原因を探して、問題を小さくしていくということだが、同時に、肯定的な側面を大きくしてやる。肯定的な側面が問題より大きくなれば問題は解決したと考えればよいのではないか。チーム支援する際、カウンセラーも、養護教諭の先生も、近所の人も入る。こういう資源を探していく。利用できる施設もリソース(資源)に入る。それから、うまくいっている例外、不登校だが時々学校に来られることがあるとか、その例外を大事にする。それもリソースである。種類としては、内的なものとしては、能力とか興味のあることなど。外的なものとして家族、友人、愛用の物、ペット

となど。あと仲間関係としてピアサポートがあるが、友だちは最強のリソースである。

もう1つ解決志向で大事なものは、小さなことでいいから何か働きかけること。1つの原因だけで不登校が起こっているわけではない。しかし小さな変化が全体のシステム、全体の状況に影響してくることがある。だから、できることから小さくてよいから変化を起こしていく。一人で解決しようとしなないということ。チーム援助は、アメリカでは保護者が入ったり、スクールカウンセラーが入ったり、時には本人が入る場合もある。解決志向の考えでいくと、本当は問題を抱えている本人が一番問題解決の専門家である。日本ではまだ本人が入るところまでいかないと思うが、そういう中でチーム援助を続けていく。右の図は石隈・田村式援助シートである（石隈利紀他（編著）「チーム援助で子どものかかわりが変わる」ほんの森出版、2005年より）。チームで話し合っていくときに、お互いに情報を共有するという、お互いにコミュニケーションをして目標を共有するという、誰が何の援助をするのかということを決めていくことが大事。そのときに、こういったシートを使うのもよい。

学校心理学では、4つの側面から子どもたちの援助を考えていく。1つは学習面、勉強について。2つ目は心理社会面、情緒的な問題とか友だち関係。3つ目は進路面、得意なこととか趣味、将来の夢や計画、進路の希望。4つ目が健康面。健康状態、身体面での訴え。まずは、1番目にうまくいっていることや、よいところをあげる。解決志向である。そして、気になるところ、援助が必要なところを書き出す。お互いに話し合いながら書いていく。そして、今までやってみたこと、今やっていること、対応策を書く。一人一人が違う。ここで共有するということが大事。

最後の援助策というところで、これからの援助で何を、誰が、いつからいつまで行うか、この3つを話し合うことによって、チームで援助する際にかかわっている人が自分はこのをやればいいんだ、すべてを丸抱えじゃない、と気持ち的にも楽になる。大事なことは、人に丸投げしないということと自分が丸抱えしないということ。お互いに協力し合って行っていくことが大事。そういうときにシートを活用するとよい。

【石隈・田村式 援助チームシート 標準版】

実施日： 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 第 回
 次回予定： 年 月 日 () 時 分 ~ 時 分 第 回
 出席者名： ()

苦戦していること ()

児童生徒氏名 年 組 番 姓 名	学習面 (学習状況) (学習スタイル) (学力) など	心理・社会面 (情緒面) (対人関係スキル) (人間関係) など	進路面 (得意なことや趣味) (将来の夢や計画) (進路希望) など	健康面 (健康状況) (身体面での訴え) など
援助の ま と め	(A) いよいところ 子どもの自覚事項	得意なこと	得意なこと	得意なこと
	(B) 気になるところ 援助が必要なところ	得意なこと	得意なこと	得意なこと
	(C) してみたこと 今までやった、ある い、今やっている 援助とその結果	得意なこと	得意なこと	得意なこと
援助 方 法	(D) この時点での 目標と援助方針			
援 助	(E) これからの援助 で何を行うか			
	(F) 誰が行うか			
	(G) いつから いつまで行うか			

編者：石隈利紀著、学校心理学―基礎から実践まで―編纂委員会編、監修委員：石隈利紀、田村龍子著、石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門―学校心理学―実践・実践編、図書文化